ゼミ生、そしてその家族との出会い

林　慶雲

時間が経つのはとてもはやい。いつの間にか、私がこの名古屋外国語大学に着任して二〇二〇年で十五年目を迎えた。勤続年数に限っては、現在所属するグローバルビジネス学科の前身の国際ビジネス学科からグローバルビジネス学科への変遷を知る「最古参」となった。学部学科を取り巻くさまざまな環境変化を知るが故に、最古参の意味を改めて考え、果たさなければならない役割が大きいことを痛切に感じている。

この十四年間で、数多くの学生と出会い、素晴らしい思い出が数え切らないほどできた。

私のゼミは、毎年、新しいメンバーを迎え、また、卒業するメンバーを社会に送り出す、一連の指導の繰り返しである。だが、ゼミ生一人ひとりとの出会いと思い出はさまざまであり、豊富な経験であふれている。私は、そのことを心に刻んでいる。

ここで、数年前に卒業したゼミ生、Eさんとの出会いとその後を紹介したい。

確か、合同祭が行われる晩秋の頃であったか、「合同祭の時に研究室にいらっしゃいますか」と、私に問い合わせがあった。特にほかの予定は入れていないこともあって、「来ます」と、返事をした。当時、四年生だったEさんが合同祭前に一度、私の研究室を訪ねてくれた。Eさんは、「合同祭の二日目には部活の仲間と一緒にステージに登場し、パフォーマンスを行います。今回の合同祭は、大学生活最後の合同祭となるため、家族も応援に来る予定です。」「両親が一度、先生にご挨拶したいと申していますので、もし先生がいらっしゃるなら、研究室に連れてきてもよろしいでしょうか」との、問合せであった。そこで私は、「もし、お会いできるのならば、是非お会いしたい」と返事をした。

そして、合同祭の二日目、Eさんのご家族が予定通り、研究室にお越しになった。ご両親と妹さん、そして驚いたことに、ご祖母様の姿も。ご高齢のため車いすのご利用であった。

学生のご家族を研究室でお迎えすることは、私にとって初めてのことだったので、どう対応すればよいか、分からなくて、わくわくするものの、戸惑いを感じ、敬語遣いなど、中国出身である私には多くの不安があった。

Eさんのお父様から、私に次のようなご挨拶があった。そのご挨拶は心を込めた丁重なものであったため、今なお、鮮明に覚えている。

「娘が大学四年間で、こんなに成長できたことは、先生のおかげです。おかげさまで就職活動も無事終えて、銀行からの採用内定をもらい、家族みんながとても喜んでいます。感謝しています。」

「感謝」や「ありがとう」といった言葉は、それまでのゼミ生から当然言われたことはあった。だが、学生の保護者から、しかも面と向かってそのように言って頂くことに、言葉の重みがあり、かなりこれまでとは異なる印象をもった。言って頂いている側からすれば、とてもありがたいことだと受けとめると同時に、恐縮する気持ちが正直なところあった。

一方、Eさんは、在籍していた当時のゼミにおいて、とても貴重な存在の一人であったと思い出す。彼女は、性格が明るく、世話好きの一面があった。彼女は、ゼミの皆さんから慕われ頼られる存在であった。彼女のような学生がゼミにいると、本当に私は助けられていたと思い返す。

Eさんは、誰よりも責任感のあるゼミ生であった。私はEさんに感謝の意を表したい。ここで、これを裏づける一つのエピソードを紹介したい。

四年次のゼミ合宿の際、Eさんは幹事役を引き受けてくれた。合宿の幹事役といえば、研修先の決定や宿泊先の予約、交通手段の確保（電車切符の手配、集金、経費の精算）など、負担の多い役割である。昨今、自ら手を挙げってやりたいと申し出てくれる学生は少ない。だが、Eさんは、人が敬遠するようなことであっても、「みんなのためになるなら」、と率先して自発的にやってくれた。Eさんが勤めてくれた幹事役の内容は、一般的な幹事役の果たす役割の域をはるかに越えていた。Eさんは、事前に、自費で合宿先を下見し、交通経路や所要時間などを調べた上、詳細なスケジュー表を作成し、私とゼミ生に資料を配布してくれた。Eさんが事前に現地調査をしてくれたことを、後から聞いたゼミの皆さんは、ただただその強い責任感に感動し感激し、心から感謝していた。些細なことというかもしれないが、感動・感激・感謝をいうのであるならば、私からむしろ彼女に言うべきであった。

先ほど、Eさんが普通の学生だと紹介したが、彼女の一年生の時を思い出すと、普通ではなかった一面があったことを思い出す。私は、EさんのBasic accountingの授業を担当した。ある日、授業が終了したあと、彼女は、教壇の前にきて、私に言葉をかけた。「お話したい事があります。ちょっと、お時間よろしいですか。」私は授業に関する質問かと思った。「どうぞ、どのあたりがわからないでしょうか」と、聞いた。私の予想と違って、彼女が私に打ち明けてくれたのは、授業に関するものではなかった。大学を続けるかどうかの相談であった。彼女が申し出てくれたのは、「大学に入ってから、授業が難しくてついていくのが大変です。不安で仕方がなく、休学しようかと、家族と相談しています」との、進路に関する内容であった。Eさんは、さらに私の想定したこと以外のことを打ち明けてくれた。「高校の時、精神的不安定と病院で診断されています。現在も通院中で、クスリも服用しています。」外見からは、まったくそのようには見えないので、私は驚いた。彼女は私に話を続けた。「英語の授業は、難しくて頭に入らないことがあります。でも、この会計の授業だけは、計算問題があって、ちゃんと理解できるような気がします。私は会計の勉強が好きで、もっと会計のことを勉強したいです。今後、どのような勉強すればよいか、教えてください」と。率直に言うが、私は教育心理学者ではないので、どのような学生がどの科目を得意とするかについては、的確な助言ができる自信はない。しかし、会計に関して言うならば、独特な思考や論理の上に成り立っているため、かなり学力の高い学生であっても理解しきれないことがある。一方、他の教科がほとんど苦手だが、会計だけは得意な学生が確かにいる、と直観的に思う。

私は、「会計科目が好きなら、これに重きをおいて勉強すればよい」と、彼女に伝えた。

「ビジネス学科のカリキュラムには四つの専門領域があり、そのなかの一つはアカウンティングである。勉強が進んでいくと、日商簿記検定試験やファイナンシャルプランナーの検定試験などが受けられる。そういった検定試験を受け、能力が認められれば、将来の進路に大きな可能性が広がる。一般企業の経理職や銀行、証券関係の職に就く可能性もある」と、彼女に助言した。この時の話が転機となったかどうかはわからない。

彼女はその後、三年から私のゼミに入って真剣に会計の勉強を続けた。私もできる限り、彼女の疑問・質問に答えて指導を行った。彼女自身の努力が実り、在学中に、日商簿記検定試験、ファイナンシャルプランナー検定試験を受け、結果を出してくれた。就職活動も、さまざまな苦労もあったようだが、最終的に希望していた地元銀行に就職することになった。

Eさんが卒業して、もう七、八年も経ったかと思う。今なお、私は、時折、その頃のことを思い出す。ゼミ合宿を開催するたびに、当時Eさんが率先して自主的に実地調査をし、調整してくれた、その記憶がいつも鮮明に蘇る。

ゼミ生との出会い、そのなかでの素晴らしい思い出は数えきれない。歳月を経ると、その中の一部が徐々に薄れ風化していくものかもしれない。しかし、時間が経って、かえって印象が強くなる一シーンが、私の脳裏に加わり焼き付いている。それが、Eさんご家族が私の研究室にお越しになった時の風景である。Eさんご家族が来室された時のお帰りの際、ご祖母様が乗った車いすをEさんのお父様が押し、その後ろに続いて歩くEさん姉妹、そしてお母様の姿であった。まるで絵に描いたような家族愛に満ちたシーンであった。Eさんのご家族に幸いあれ、と心から祈念するばかりである。

ほんの一例ではあるが、ご紹介したような場面に出会う教育職にある私自身、成長著しい彼らから多くのことを学び、私も成長していると感じている。昨今、ＡＩの活用の場が拡がる中、減少してきているように思われるが、教育の現場、学生たちとの学びの中において、心の琴線に触れる、真の人との出会いと心の成長を見とどけることができる瞬間がそこにはあり、五年、十年、二十年後の彼らを見とどける楽しみを感じている。